九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学附属図書館蔵『おちくほ』解題と翻刻(二)

梁, 丹
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1445860

出版情報：文獻探究. 51, pp.13-31, 2013-03-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九州大学附属図書館蔵『おちくほ』解題と翻刻（二）

梁　丹

翻刻

（21・ウ）さてはとのゐ物
（22・オ）
に、人のこふも、びなきはえいだし侍らじとおもひ
侍りてなん。さるべきや侍る。たまはせてんや。おり
〳〵はあやしき事なれど、とみにてなん」と、はし
りかきてやりたれば、「おとづれたまはぬをこそ、いと
こゝろうくおもひたまふれば、萬とゞめつ。いとあやし
けれど、ものし給ふらん。きちやうたてまつる」とて、
二をん色のはりわたなどおこせたり。いとうれし
き事かぎりなし。とり出でみせたてまつる。
木丁のひもときおろすほどに、きみおはしたれば、
入奉りつ。女ふしたりがたくおぼゆれば、「くるしう
おぼへたまはんに、なにかをきたまふ。やがて」ふし給ぬ。
こよひは、はかまもいとかうばし。はかまもひとへもあれば、
（22・ウ）
れいの人ごゝちしたまひて、おとこもつゝましから
ずふしたまひぬ。こよひは時々御いらへしたまふ。
いとよになう、あるまじうおぼへ給ひて、よろづにか
たらひたまふほどに、夜も明ぬ。「御車ゐてま
いりたり」と申せば、「いま雨やみて。しばしまて」とて
ふしたまへれば、あこき、御てうづ、かゆ、いかでまいらん
とおもひて、みづしにやかたらはましとおもへど、
大かたにもおはしまさねば、御かゆもよにもせじと思へ
ど、いきてかたらふ。「たちわきのともだちなん、よべ
ものいはんとてきたりしを、雨にとまりて、ま
だかへらぬに、かゆくわせんとおもふをなん、なくて。
かはらせすこしたまへ。さてはひきぼしなどやの
（23・オ）
こりたる。すこしたまへ」とのべば、「あないとおしさ。かへ
らせたまはんれう、いますこしあらん」といへば、「かへり
たまはんに、御としみおぞしたまはん」。北の方、けし
きよろしとみて、かたはらなるいじをあけて、
たゞとりにとれば、「すこしはのこしたまへ」といへば、
「さよ〳〵」といひて、かみにとりわけて、すみとりに
いれて、ひきかへして、もていきて、つゆに、「御かゆいと
よくしてもてこ」とて、おはしげなる御だいもとめ

ありく。御てうづまいらんと、もとめありく。「御かたには、いづくのはぞう、たらひかあらん。三の御方のをとりもてきて、御前にまいらむ」とて、かしらかいくだしなどしてゐたり。女君は、わりなうくるしと、おもひふ

（23・ウ）

したまへり。あこき、いときよげにそうぞきて、いときよげにけさうして、おびゆるらかにかけてまいるうしろで、かみたけに三じやくばかりあまりて、いとおかしげ也と、たちわきもみせくる。「此みかうしはまいらではあらんずる」とひとりごとしてまいるを、少将のきみもゆかしうて、「いとくらし。あげよ」とのたまふめり」との給へば、ものふみたてゝあげつ。男きみをきたまふて、御さうぞくし給ふて、「車はありや」とゝひたまふ。「御門に侍る」と申せば、いでたまひなんとするに、いときよげにて、御かゆまいりたり。御手水とり|り|ぐしてまいりたり。「あやしう。びなしときゝしほどにより|り|は」とおぼす。女君は、

（24・オ）

いとあやしう、いかでとおもひたまへり。雨すこしよろしうなれば、人さはがしうあらねば、やをらいでたまひなんとす。女君の御|御|かたをみたまへば、まめやかにいといつくしければ、いとゞかぎりなくおほ|ほ|しまさりて、いとあはれとおぼす。かゆなどすこしまいりてふし給ぬ。よさりは三日の夜なれば、いかさまにせん、こよひもちゐいかでまいるわざもがなとおもふに、またいふべきかたもなければ、いづし|み|どのへふみふかく。「いとうれしう、きこえさせたりし物を、たまわせたりしなん、よろこびきこえさする。又あやしとは、おぼさるべけれど、こ|こ|よひもちゐなん、いとあやしきさまにて、よう侍る。とりまずべ

（24・ウ）

きくだ物などなん侍ぬべくは、すこしたまはせと。まら|ら|うどなん、しつ|は|しとおもひ侍りしを、四十五日のかたゝがふるになん侍ける。されば、此ものどもはしばし侍べきを、いかゞ。たらい、はざうのきよげならんと、しばしたまはらん。とり|り|あつめて、いとかたはらいたけれど、たのみきこえさするまゝに」とりやり|り|つ。つねの御もとより、たゞいま、

よそにてはなをわが恋をますかゞみそへるかげとはいかでならまし」とあれば、けふなん御返し、

身をさらぬかげとみえてますかゞみはかなくうつることぞかなしき」。いとおかしげにかきたれば、いとおかしげにみたまへるけしきも、心

（25・オ）

ざし有|有|がほ也。あこきがもとには、いづみの家より、「むかしの人|人|の御かわりは、あはれにおもひきこえて、女子も侍らねば、むすめにし奉らん、身ひとつはいとやすからにうちかしづき、すへたてまつらむとおもひて、さきぐも御むかへすれども、わたりたまはぬこそ、うらみきこゆれ。ものどもはいとよか也。

いかにも〳〵つかひたまへ。たらい、はんざう奉る。あな
ことやう。みやづかいする人は、かやうの物、かならずもたる
は。なきか。いまゝではたのまざりつる。身になきは、
いとみぐるしきを、いとあやしき事。奉る。もちゐ
はいとやすき事。いま只今してたてまつる。も
のゝぐ、もちゐなどめすは、御むこどりし給ひて、三日の

（25・ウ）

まふけし給ふか。まめやかにいかでたいめんもがな。
いと恋しくなん。なにごともなをのたまへ。ときの
ずりやうは、よにとく有ものといへば、たゞいまその
ほどなめれば、つかまつらん」と、いとたのもしげに侍。
みるにいとうれし。君にみせたてまつれば、「も
ちゐは何のれうにこひつるぞ」とのたまへば、うちゑ
みて、「なをあるようありてなん」ときこゆ。だいのいと
おかしげなる、たらい、はざう、いときよげなり。おほき
なるゑぶくろに、しいこめ入て、かみをへだてゝ、くだもの、
からものつゝみて、いとくわしくなんおこせたり
ける。こよひは、たゞおかしきさまにて、もちゐをま
いらんと思ひて、とりて、よろづに、くだ物、くりなど、か

（26・オ）

きゐたり。日やう〳〵くるゝほどに、すこしやみたる雨、
ふる事かぎりなし。もちゐやえざらんとおもふ
ほどに、おとこ、おほがさきせて、ほうのひつにをこせた
り。うれしき事ものにゝず。みれば、いつのまにし
たるにかあらん、くさもちゐふたくさ、れいのもちゐ
ふたくさ、ちいさやかにおかしうて、さま〴〵也。ふみには、
「にはかにのたまへりつれば、いそぎて、おもふにやあらざらん。
こゝろざしくちをし」といへり。雨いとうふるとて、いそげ
ば、さけばかりのませ、返じ、「すべてきこえさすれば、
よのつねなり」とよろこびやりつ。しらしつとて
うれし。物のふたにすこしいれて、きみにまいる。
くらうなるまゝに、雨いとあやにくに、かしらさしいづ

（26・ウ）

べくもあらず。少将、たちわきにかたらひたまふ。「くち
をしう、かしこにはえいくまじかめり。このあめよ」と
の給へば、「ほどなく、いとおしくぞ侍らんかし。さ侍れ
ど、あやにくになる雨はいかゞはせん。こゝろのおこたり
なくばこそあらめ。さる御ふみをだにものせさせた
まへ」とて、けしきいとくるしげ也。「さかし」とて、かいた
まふ。「いつしかまいりこんとてしつるほどに、かうわり
なかめればなん。こゝろのつみにあらねど、おろかにおも
ほすな」とて、たちはきも、「たゞいままいらん。きみお
はしまさんとしつるほどに、かゝる雨なれば、くちをし
となげかせたまふ」といへり。かゝれば、いみじうくちおし
とおもひて、たちわきが返んじに、「いでや、「ふるとも」と

（27・オ）

いふ事も有を、いとゞしき御こゝろざまにこそあめれ。
さらにきこえさすべきひもあらず。御身づからは、なにの
こゝちのよきにも、こんとだにあるぞ。かゝるあやまちし
いでゝ、かゝるようありや。さてもよの人は、「こよひこざ

らん」とかいふなるを、おはしまさ○らんよ」とかけり。君の御返には、ただ、

　世にふるをうき身とおもふわが袖のぬれはじ
つけるよひの雨かな」とあり。もてまいりたるほど、
いぬの時も過ぬべし。火のもとにてみ給ひて、きみ
もいとあはれとおもほしたり。たちわきがもとなる
ふみをみ給ひて、「いみじうくねりためるは。こよひは
三日の夜なりけるを、ものゝはじめに物あしく

（27・ウ）

おもふらん、いと〳〵をし」。あめは、いやまさりにま
されば、おもひわびて、つらづえつきて、しばしよりゐ
たまへり。たちはき、わりなしとおもへり。うちなげ
きてたてば、少将、「しばしゐたれ。いかにぞや。いきやせん
とする」。「かちからまかりて、いひなぐさめ侍らん」と申せば、
きみ、「さらば、われもいかん」との給。うれしと思ひて、「いと
よふ侍なり」と申せば、「おほがさひとつもとめよ。きぬ〳〵
ぎてこん」とて、入給ぬ。たちはき、かさもとめにありく。
あこき、かゝ出立給もしらで、いといみじとなげく。
かゝるまゝに、「あいぎやうなのあめや」とはらだてば、君
はづかしけれど、「などかくはいふぞ」との給へば、「なをよろ
しうふれかし。をりにくゝもおぼへ侍かな」といへば、「ふり

（28・オ）

ぞまされる」としのびやかにいはれてぞ、いかにおもふらん
と、はづかしうてそひふしたまへり。われは、たゞしろき
御ぞひとかさねをき給ひて、いとかてうけにひきつれ
て、たちわきとたゞふたりいでたまひて、おほがさを
ふたりさして、かどをみそかにあけさせて、いとし
のびて出給ひつゝ、やみにて、わらふ〳〵道のあしき
をよろぼひおはするほどに、さきおひて、あまた火
ともさせて、こうぢぎりに、つじにさしあひぬ。いと
せばきこうじなれば、えあゆみかくれず。かたそばみて、
かさをたれかけてゆけば、ざうしきども、「このまから
ものども、しばしまかりとまれ。かばかり雨もよに、夜中に
たゞふたりゆくは、けしきあり。とらへよ」といへば、わびし

（28・ウ）

くて、しばしあゆみとまりてたてれば、火を打ふりて、
「人々、あしどもいとしろし。ぬす人にはあらぬなめり」と
いへば、「さほどのこぬす人はあししろくこそ侍らめ」、
こはき過るまゝに、「かくたてるはなぞ。居侍れ」とて、
かさをはう〳〵とうてば、くそのいとおほかるうへに
かゞまり居ぬ。また、うちはやりたる人、「しゐて、この
かさをさしかくして、かほをかくすはなぞ」とて、いき
過るまゝに、大かさをひきかたぶけて、かさにつきて
くそのうへにおゐたる。火を打ふきてみて、「さし
ぬきゝたりけり」。「身まづしき人の、おもふ女のがり
ゆくにこそ」ぬどくちぐ〳〵にいひて、おはしぬれば、たちて、
「ゐもんのかみのおはするなめり。われをけんぎのものとゝ

（29・オ）

や、とらふるとおもひつるにこそしにたりつれ。わが、
あししろきぬす人とつけたりつるこそおかしかり

つれ」など、たゞふたりかたらひてわらふ給ふ。「あはれ、
これよりかへりなん。くそつきにたり。いとくさくて、
いきたらば、中々うとまれなん」とのたまへば、た
ちわき、わらふ〳〵、「かゝる雨に、かくておはしましたらば、
御心ざしをおぼさん人は、ざかうの香にもかぎなし
たてまつらん。とのはいと遠くなり侍りぬ。ゆくさきは
いとちかし。なをおつ|ろしさしなん」といへば、かばかり心
ざしふかきさまにて、おりたちて、いたづらにやなさ
むとおぼして、おはしぬ。かどからうしてあけさせて
入たまひぬ。たちわきがざうしにて、「まづ水」とて、御あし
（29・ウ）
すます。又たちわきもあらひて、「あかつきにはいみじくとて
おきよ。まだくらからんにかへりなん。とゞまりてある
べきにもあらず。いとようなるすがたなるべし」と
のたまひて、かうししのびやかにたゝきたまふ。女君は、
こよひこぬをつらしとおもふにはあらで、大かたきこえ
いでば、北の方、いかにのたまはん、世の中のすべてうき
事をおもひみだれて、うちなきてふしたまへり。
あこき、おもひまふけたるかひなげにおもひて、おまへ
によりふしたれば、ふとをきて、「なと、みかうしのなる」
とて、よりたれば、「あげよ」とのたまふこゑに、おどろき
て、ひきあげたれば、入おはしたるさましほるばかり
なり。かちよりおはしたなめりと思ふに、めでたくあは
（30・オ）
れなる事ふたつなくて、「いかでかくはぬれさせたまへり
ぞ」ときこゆれば、「これなりがかんだうおもしとわび
つるがくるしさに、くゝりをわぎにあげてきつ
るに、たふれてつちつきにたり」とて、ぬぎたま
へば、女君の御ぞをとりてきせ奉りて、「ほし侍らん」と
きこゆれば、ぬぎたまひつ。女のふしたまへる所により
たまひて、「かくばかりあはれにてきたりとて、ふと
は|かきいだきたまはゞこそあらめ」とて、かいさぐり給ふに、
そでのすこしふ|ぬれたるを、おとこ君、こざりつるを
おもひけるも、あはれにて、
「なにごとをおもへるさまの袖ならん」
とのたまへば、女きみ、
（30・ウ）
「身をしる雨の雫なるべし」とのたまへば、
「こよひはみをしるならひば、いとかばかりにこそ」とて
ふしたまひぬ。あこき、此もちゐをはこのふたに
おかしうとりなしてまいりて、「これいかで」といへば、
きみ、「いとねぶたし」とてをきたまはねば、「なをこよひ
御らんぜよ」とてきこゆれば、「なにぞ」とて、かしらもた
げてみたまへば、もちゐをおかしうしたれば、少将、たれ
かくおかしうしたらん、かくてまちけるとおもふも、され
ておかしければ、「もちゐにこそあめれ。くうやう有と
か。いかゞする」とのたまへば、あこき、「まだやはしらせた
まはぬ」と申せば、「いかゞ。ひとりあるにはくうわざかは」とのた
まへば、きゝで「みつとこそは」と申せば、「まさなくぞあな
（31・オ）

る。女はいくつか」とのたまへば、「それは御こゝろにこそは」とてはらふ。「これまいれ」と女君にまいりたまへど、はぢてまいらず。いとじほうに三(三)くいて、「蔵人の少将もかくやくいし」とのたまへば、「さこそは」といひてゐたり。夜ふけぬればねたまひぬ。たちはきがりいきたれば、まだしとゞに、かいかゞまりてゐたり。「かさはなくやありつらん。かくぬれつらん」といへば、しのびて道のほどの事いひてわらふ。「かばかりの御こゝろざしは、いまもむかしもあらじ。たぐひなしとはおもひきこえ給也(や)」といへば、「すこしよろしかん也」と、「なをあかぬぞな、すこしよろしきは」と、「女はおほけなきこそにくけれ。いみじくつらき御心のつゞくとも、みそたびばかりは、こよひにゆるし

（31・ウ）

きこえたまひてんや」ととへば、「をのがかたさまにものいふ」などいひてねぬ。「まめやかに、こよひおはせざらましかば、いみじからまし」などいひねにねぬ。夜さへふけぬれば、いととく明過ぬ。「いかでか出んとする。人しづかなりや」などいひふし給へるほどに、あこき、いと〳〵おしきわざかな、いし山よりもけふ帰おはしぬらん、人もこそふとくれとおもふも、しづ心なくて、御(御)かゆ、御手水などおもふに、いそぎありけば、たちわき、「などかくしづ心なくありきたまふ」といへば、「いかゞは。ほどもなき所に人をすへ奉りたれば、人やふとくるとて、さはぎありくぞかし」といらふ。「車とりにやれ。やをらふといでなん」とのたまふほどに、石山の人のゝしりて帰おはしぬ。「ふようなめり」とて、出たまはずなりぬ。女、かくれもなき所に、人もこそくれ、いかにせんとむねつぶれて、いとおそろし。あこきも、いとあはたゝしくおぼゆ。あわせ、いときよげにて、かゆまいりたり。御てうづまゆり、いそぎまいるが、心もとなければ、いま人ひとりもがなとおもふに、いとゝじく、車よりおりたまふやおそきと、北方、「あこき」と、よびのゝしりたまへば、へ(て)だてのしやうじをあけているは、さすべき人もおぼへず。かうしのはさまへだてにまいりたれば、「きごうじたる人は、くるしければうちやすむに、此ごろやすみをりつらん、おるゝ所にこぬはなぞ。すべて人の身ひとつばかりはらだゝしくよしなきものなし。いかでこれかへし申てん」とのたまへば、心地にはいとうれし

（32・ウ）

きことゝおもひながら、「きたなきものうちこし侍つるほどなり」ときこゆれば、「はやう御てうづまいれ」とのたまへば、たちてありくそう(う)もなし。おものいできにければ、みづし所にきて、「あがきみ〳〵」といひて、かのしろきこめおほくにかへて、御だいまいりにきぬ。ものきりはならひたれば、少将の君、びなしとのみきゝしに、いとこゝろにくゝおぼす。女君もいかなるならんと、おとこ君もをさ〳〵まいらず。女ぎみはたをきたまはねば、御まかりして、たちわきにいときよげにてくはせられたれば、いふやう、「こゝらのひ比さぶらひつれど、かくおろしなどやみえつる。なをわが君のおはしますけなりけり」といへば、「う

（32・オ）

れしき御こゝろみえんとする。むまのはなむけ」といへば、
（33・オ）
「あなおそろしの事也」とて、たれも〳〵わらふ。かうて
ひるまで二所ふい給へるほどに、れいはさしものぞきたま
わぬ北方、なかへだてのさうじをあけ給ふに、かたければ、
「このあけよ」とのたまふに、あこきもきみもいかにせんと
わびたまへば、「さはれ、あけたまへ。木丁あげてふせたま
えとば、物引かづきてふいたらん」とのたまへば、さしもこそ
のぞきたまへと、わりなけれど、やるべきかたもなければ、き
ちやうづらにをしよせて、女君ゐたまへり。北方、「などおそくは
あけつるぞ」ととひたまへば、「けふあす御ものいみに侍」といら
へれば、「あなことぐし。なでう、わがいゐなどなき所にては、物
いみ侍」との給へば、「あが君、なをあけよ」とて、あけさすれば、
あらゝかにをしあけていりまして、つゐゐてみれば、
（33・ウ）
れいならずきよげにしつらひて、木丁たて、きみもいと
おかしげにとりつくろひて、おほかたのかもいとかうばし
ければ、あやしくなりて、「など、こゝのさまも、みさまも
れいならぬ。もしわれなかりつるうちにことやありつ
る」とのたまへば、おもてうちあかみて、「なにこと侍らん」と
いらへたまふ。少将、いかゞあるとゆかしうて、きちやうの
ほころびよりふしながらみたまへば、白きあや、かいね
りなど、よからねど、かさねきて、おもてひらゝかにて、北の
かたとみへたり。くちつきあいぎやうづきて、すこしに
ほひたるけつきたる。きよげなりけり。たゞまゆ
のほどにぞおよすげ、あしげさもすこしいでゐたり
とみる。「まいりたるやうは、けふこゝにかいたるかゞみの
（34・オ）
おかしげなるに、この御はこのいりぬべくみえし。しばし
たまへときこえんとてなん」。「ようはべなり」とのたまへば、
「かう心やすくものしたまへば、いとよくなん。さはたまへ」
とて、ひきよせ奉りたまへり。うつして、わがもたま
える入たまへり。げに入たれば、「かしこきものをもかい
てけるかな。このはこのやうに、いまのよのまきゑこそ
さらにかくせね」とてかきなでたまへば、あこき、いとにくし
とみて、「此御かゞみのはこもなくてや」といへば、「いま又も
とめてたてまつらん」とて立給ふ。いとこゝろゆきにたる
さまにて、「かのきちやうはいづこのぞ。いときよげなり。れいに
にぬ物も有。なをけしきづきたり」とのたまへば、女君、いかに
きくらんとはづかし。「なくてあしければ、とりにやり
（34・ウ）
侍」ときこゆ。なをけしきをうたがはしくおもひたまひ
ぬるのちに、あこき、「まもやかにはおかしくこそ侍れ。たて
まつりたまはん事こそなからめ、もたせたまへる御てうど
を、かくのみとらせたまへるよ。さきぐの御むこどりには、
「しかへて。たくしばし」と、びやうぶよりはじめて、とりた
まひて、たゞ我ものゝぐやうにて、たてちらしておはし
ます。御ごきをだにきたにきこえとりたまひて
き。いまのにもいてまうできなん。この御方の物は、
たゞみるまゝに、御かたぐの物にのみなりはてぬ。かくこゝろ

ひろくおはしましませども、人の御心ざしやはみゆる」と、はらだちゐたれば、女君おかしくて、「さはかれ、いづれも〳〵ようはてなばたびてん」といらふれば、まことゝきゝ

（35・オ）

たまふ。木丁をしやりて出て、女きみひきいれて、

「まだわかうものしたまひけるは。むすめどもはこれにやにたる」とのたまへば、「さもあらず。みなおかしげになんおはしあふめ|める。あやしうみぐるしうてもみたまへるかな。きゝつけて、いかにのたまわん」といふ、すこしうちとけたるをみるまゝに、いとおかしげなれば、なをあらじにておもひやみなましかばとおもふ。かゞみ|みのはこのかわり、このあこきみといふわらはしてをこせたり。くろぬりの箱の九すばかりなるが、ふかさ三すばかりにて、ふるめきまどひて、ところ〳〵はげたるを、「これくろけれど、うるしつきて、いとま|きなり」とのたまはへれば、「おかし」とわらひて、御かゞみいれてみるに、

（35・ウ）

こよなければ、「いで、あなみぐるし。中々いれでもたせたまへれ。いとうたてげに侍に」ときこゆれば、「さはれ、ないひそ。たまはりぬ。げにいとよう侍」とて、つかひやりつ。少将、とりよせてみたまひて、「いかでかゝるこたひの物をみいで給ひつらん。おいたまへめるものをさるすがたに|にて、世になきものもかしこしかし」とてわらひ給ふ。あけ|けぬればいでたまひぬ。女きみ、をきたまひて、「いかにしてかくばぢかくす事はしつるぞ。木丁こそいとうれしけれ」とのたまふ。あこき、「しかし侍りし」などかたりきこゆ。おさなきこゝちにも、おもひよらぬことしいでけるも、あはれにらうたくて、げにうしろみとつけしかひありとおもふ。たちわきがかたりし事|とをかたりて、いとあ

（36・オ）

はれにて、「御こゝろながくは、ねたくおもひおとしたる世に、いかにうれしからん」といふ。その夜はうちにまいりたまひて、えおはせず。つとめて御ふみ有。「よべは内にまいりてなん、えまいりこずなりにし。いかにあこき、これなんかんだう侍けんと、おもひやりしもおかしうこそ。さがなさは、たがをならひたるにかとおもふにも、おそ|そろしうなん。こよひは、「むかしはものを」となん。

　さらでこそそのいにしへも過にしを一夜へにけることぞかなしき」。つゝましき事のおほうおぼされためる世は、はなれたまひぬべし。心やすき所もとめてん」とこまやかにきこえたまへり。「御返はや」とて、「もてまいらん」とたちはききこゆれば、御|ふみをあこき、

（36・ウ）

みてわらふ。かたり申てけりと、「いふべき人のなきまゝにこそ、いさかはれ侍」といふ。「よべは、「まだきしぐるゝ」

　一すぢにおもふこゝろはなかりけりいとゞうき身ぞわくかたもなき」。まこと、うき世は行させりと（かとか本ノマヽ）いふやうに、いでかたくなん。あこきは、「つみあらん人はをぢ給ぬべかめり」とあるを、もちていづるほどに、蔵人少将まづめすといふめれば、えをきあへで、ふところにさし

いれてまいりたり。御びんまいらせたまはんとて
なりけり。御うしろをまいるとて、君もうつぶし、われ
もうつぶしたるほどに、ふところなるふみのおちぬる
もえしらず。少将みつけたまひて、ふととりたまひ
つ。御びんかきはてゝ入給ふに、いとおかしげれば、三

（37・オ）

の君に、「これみたまへ。これなりがおとしたりつる」とて、
たてまつり給ふ。「てこそいとおかしけれ」とのたまふ。「おち
くぼのきみのてにこそ」とのたまふ。少将、「さはたれを
かいふ。あやしの人の名や」。「さいふ人有。物ぬふ人ぞ」と
てやみぬ。三のきみは、ふみをとりたまひて、あやしと
おもひゐたまへり。たちはき、御ゆするのてうどなどとり
をきて、たつとて、かいさぐるに、なし。こゝろさはぎて、立
居ふるい、ひもときてもとむれど、たえてなければ、い
かになりぬらむとおもひて、かほあかめてゐたり。身
より外にありかねば、おつともこゝにこそあらめとて、
おましをまづとりあげてふるへども、いづこにかあらん。
人やとりつらん、いかなる事いでこんとおもひなげ

（37・ウ）

きて、つらづえをつきて、ほれて居たるを、少
将、いづとて、み給ひて、「などこれなりはいとうしめ
やぎたる。物やうしなひたる」とて、わらひ給ふに、
此きみとり|りかくし給へるなめりとおもふに、しぬる
こゝちす。いとわり|りなげなるけしきにて、「いかで給
侍らん」と申せば、「われはしらず。姫君こそ。「すゑのまつ
山」とこそいひつめれ」とて出給ひぬ。いはんかたなく
て、あのきみとおもはん事はづかしけれど、いかゞはせん
とて、あこきがもとにいきて、「ありつる御返、みづから
まいらんに、もてまいらんとて、いでつるほどに、しかめし
て、御びんかゝせたまへるほどに、からうしてとらせ
たてまつりぬ。いといみじうこそ」と、われにもあらぬ

（38・オ）

けしきにていへば、あこき、「いといみじき事かな。いかな
るのゝしり出こんとすらん。いとゞしく、この御かたけしき
有と、うたがひたまふものを、いかにさはがれたまはん
とすらん」と、ふたりあせになり|りていをしがる。三のきみ、
此ふみを北方に、「しかぐしてありつる」とてみせ奉
給へば、「さればよ、けしきありとみつ。誰ならん。たち
わきがすむにやあらん、そがもたり|りつらんは。むかへむ
といひたるにこそあめれ、「いでがたし」といへば。おとこあ
わせじとしつるものを、いとくちをしきわざかな。
男いできなば、かうて世にあらじ。むかへてん。なくて
は大事なり。よきあごたちのつかい人とみをきた
りつるものを。いかなるぬす人かゝるわざをしいでつ

（38・ウ）

らん。まだきにもいはゞ、かくしまどはんものぞ」。このふみ
もいださせで、けしきをみるに、人もいひさはがねば、
あやしうおもふ。女君には、「ふみはかうくし侍りにけり。
おもてはづかしきやうなれど、侍りつるやうに御ふみかゝせ
たまひてたまはらん」といへば、君いと侘しとおもひた

まへりとはおろか也。北方もみ給つらんとおもふ、心地もいとわびしうて、「又もえきこゆまじ」と、なげき給ふ事かぎりなし。たちわきもいとおしくて、少将のきみの御前にもえまいらず、こもりゐたり。暮ぬれば、おはしぬ。「御かへりはなどたまはせざりつる」とのたまへば、「北方のおはしつるほどに」とのたまひて、御とのごもりぬ。ほどなく明ぬれば、出たまふに、明過て、人々さはがしけ

（39・オ）

れば、えいでたまはで、帰入てふし給ぬ。あこき、れいの御だい、けいめいありく。少将の君、しづかにふし給ひて、物がたりしたまひて、「四の君はいくらおほきさにいまだなり給ぬる」とのたまへば、「十三四のほどにて、おかしげなり」といへば、少将、「まことにやあらん。まろにあはせんなど、中納言のたまふなるとぞ。めのとなる人こそ、とのなる人をしりて、御ふみいで、北方も、「いかで」となんのたまふとて、めのとなる人こそにはかにせめしか。「かゝるときゝたまへ」といはんよ。いかゞおぼす」との給へば、「心うしとこそおもはめ」とのたまふ。こゝしければ、らうたしとおもひて、「こゝはいみじうまいりくるも人げなきこゝちするを、わたし奉らん所におはしなんや」とのたまへば、「御こゝろ

（39・ウ）

にこそは」との給へば、「さらばよ」などのたまひてふし給へり。ほどは十一月廿三日のほどなり。三のきみの男の蔵人の少将、にはかにりんじの祭の舞人にさゝれければ、北方てまどひし給ふ。あこき、ろひなう御ぬいものもて

きなん物ぞと、むねつぶるゝもしるく、うへのはかまたちて、「これたゞ今ぬわせ給へ。御ぬいものいできなんときこえ給ふ」といふ。きみは木丁のうちにふしたまへれば、あこきぞいらふる。「いかなるにか、よべよりなやませ給ひて、打やすませ給へり。いまをきさせ給なん時にきこえさせん」といへば、つかひかへりぬ。女君、ぬはんとてをき給ふ。「まろひとりはいかでつくゞとふいたらん」とて、をこし奉たまはず。北方、「いかに。ぬい給ひつや」とゝひたまへば、「さも

（40・オ）

あらず。いまだ御とのごもりたり」とあこき申つるは」といへば、北方、「なぞの御とのごもりぞ。ものいひしらずなありそ。われらとひとつくちに、なぞいふは。きゝにくゝ。あなわかくのひるねや。しが身のほどしらぬこそいと心うけれ」とて、うちあきわらい給ふ。したがさねたちてもていましたれば、おどろきて、木丁のとに出ぬ。みれば、うへのはかまもぬはでをきたり。けしきあしうなりて、「手をだにふれざりけるは。いまだいできぬらんとこそおもひつれ。あやしう、をのがいふ事こそあなづられたれ。この此み心そりいでゝ、けさうばやりたりとはみゆ也」との給へば、女いとわびしう、いかにきこえんと、われにもあらぬ心地して、「なやましう侍りつれば、し

（40・ウ）

ばしためらひて」とて、「これはたゞいまいできなん物を」とて、ひきよすれば、「おどろきむまのやうにてなふれ給ひそ。人だねのたえたるぞかし。かうけがへなる人に

のみいふは。この下がさねも只今ぬいたまはずは、こゝにもなおはしそ」とて、はらだちて、なげかけてたちたまふに、少将なをしの、あとのかたより（り）いでたるを、ふとみつけて、「いで、此なをしはいづこのぞ」と、たちどまりての給へば、あこき、いとわびしとおもひて、「人のぬはせに奉り給へる」と申せば、「まづほかのものをし給ひて、こゝのをおろかに思給へる。もはらかくておはするに、かひなし。あな、しらぐしの世や」とうちむづかりていふうしろて、子おほくうみたるにおちて、わづかに十すぢばかりにて、いたけなり。うち

（41・オ）

ふくれて、いとをこがましと、少将つくぐとかいばみふしたり。女、あれにもあらでものをる。少将きぬのすそをとらへて、「まづおはせ」とひきせむれば、わづらひ入ぬ。「にくし。なぬい給いそ。いますこしあらだてゝまは（と）はし給へ」。「この詞（詞）はなぞ。此年比はかうやきこし（え）つる。いかでたえ侍らん」と、の給へば、女は、「やまなしにてこそは」といふ。くらうなりぬれば、かうしをろさせて、とうだいに火ともさせて、いかでぬい出んとおもふほどに、きたのかた、ぬふやとみに（に）、みそかにいましにけり。み給へば、ぬい物は打ちらして、火はともして人もなし。入ふしにけりとおもふに、大きにはらだちて、おとゞに、「このおちくぼのきみ、心のあいぎやうなく、みわづらひぬれ、これいましての給へ。かくば

（41・ウ）

かりいそぐ物を、いづこなりしきちやうにかあらん、もちしらぬものまふけて、つゐたてゝ、入ふしくする事よ」との給へば、おとゞは、「ちかくおはしてのたまへ」との給へば、いらへとをくなりぬれば、ことばゝきこえず。少将、おちくぼのきみとはきかざりければ、「なにの名ぞ、おちくぼそ」といへば、女いみじくはづかしくて、「いさ」といらふ。「人のなにいかにつけたるなぞ。ろんなうくしたる人名ならん。きら（ら）くしからぬ人の名なり。北方、さいなみ立にたり。さがなくおはすべき」といひふし給ひけり。上のきぬたちておこせたり。又おそくもぞぬふとおぼして、萬の事おとゞにきこえて、いひきあけ給より、のたまふ、「いなや、このおちくぼのきみの、あなたにのたまふ事に

（42・オ）

したがはず、あしかんなるはなぞ。おやなかめれば、いでよろしくおもはれにしがなとこそおもはめ。かばかりいそぐに、外のものをぬいて、こゝの物にてふれざらんや何の心ぞ」とて、「夜のうちにぬい出さずは、子ともみへじ」とのたまへば、女、いらへもせで、つぶくとなきぬ。おとゞ、さいひかけてかへり給ぬ。人のきくにはづかしく、はぢのかぎりいはれ、いひつる名をわれときかれぬる事とおもふに、たゞいましぬるものにもがなと、ぬい物はしばしをしやりて、火のくらきかたにむきて、いみじうなけば、少将、あはれにことはりにて、いかにげにはづかしうおもふらんと、われもうちなきて、「しばし入れふし給へれ」とて、せめて引いれたまひて、萬にいひなぐ

（42・ウ）

さめ給ふ。「おちくぼのきみとはこの人の名をいひける也

けり。我いひつる事、いかにはづかしとおもふらんと、いと
おし。まゝはゝこそあらめ、中納ごんさへにくゝいひつるかな。
いといみじうおもひたるにこそあめれ。いかでよくて
みせてしがな」と心のうちにおもほす。北方、おほくの
ものどもを、ひとりはあり、はらだゞしからん、えひとり
はぬいいでじとおもひて、少納言とて、かたらなる人のき
よげなる、「いきてもろともにぬへ」とておこせたれば、き
て、「いづこをかぬい侍らん。などか御とのごもりにける。さば
かり「おそからんものぞ」ときこえ給ふものを」といへば、「心
ちのあしければなん。そのぬしさしたるはおまへぬい
給へ」といへば、とりよせてぬいて、「なを侍らず」といへば、
（43・オ）
「いましばし。をしへてぬはせん」とて、からうじてを
きて、ゐざり出たり。少将みれば、少納言ほかげにいとき
よげなりけり。よきものこそ有けれとみ給ふ。女君を
うちみおこせたれば、いといとうなきつやめきたる
をみて、あはれとやおもひけん、いふやう、「きこえさすれば、
ことよきやうに侍り。さりとてきこえさせねば、さる
心ばへありとだにしらせ給はじと、くちをしさになん。え
まいらするに、つかうまつらまほしう侍れど、世の中のう
たてわづらはしう侍れば、つゝましうてなん、人しれぬみ
やづかへもえつかうまつらぬ」ときこゆれば、女君、「さるべき
人も、ことにまごゝろなるけしきもみへぬに、うれしくも
（43・ウ）
おもひたまへけるかな」といらへ給へば、少納言、「げにこそはあやし
うは侍れ。うへのあやしうおはせんはれいの事、御はら
からの君だちさへ、身づからきこへざめるこそ、いと心づ
きなけれ。あたら御さまを、かくてつくゞくとおはしますこそあ
いなけれ。四のきみもまた御むこどりしたまはんとまうけた
まふ也。北方の御こゝろにまかせて、のべしらめし給ふ」。「めでたき
や。誰をかとり給ふ」とのたまへば、「左大将殿の右近の少将と
か。かたちはいときよげにおはするうちに。うちに、たゞいまな
りいで給なんと人々ほむ。御門もときめかしおぼす。御
めはなし。いとよき人の御むこなり。「いかで此わたりにもが
なと思ふ」とおとゞつねにの給ふとて、北方いそぎにいそぎ
たまひて、四のきみの御めのと、かのとのなりける人をしり
（44・オ）
たりけるを、よろこび給ひて、さざめきさわぎ給ふて、
ふみやらせ給めり」といへば、いとうれしくて、といひて、いと
よくほゝゑみたるまみ、くちつきの、火のあかきにはへて、
にほひたるものから、はづかしげなり。「少将のきみはいかゞと
いふ」ときみのたまへば、「しらず。「よかなり」とやの給ふらん、
人しれずいそぎ給ふ」といふに、少将、「そらごと」ゝいらへまほし
けれど、ねんじかへしてふし給へり。少将、「まらうと又そひ
給はゞ、御前の御み所いとくるしげにおはしますべかめる。
よき事もあらば、せさせ給へかし」といへば、「なでう、かゝるみぐ
るしき人がさる事はおもひかくる」といへば、「いで、あなけし
からずや。などかくはおほせらるゝ。このかしづかれ給ふ御かた
〳〵はなか〳〵」といひさして、「まことは、此世にはづかしき
（44・ウ）

ものとおもひたまへる弁の少将のきみ、よ人はかたのゝ
少将と申めるを、その殿に、かのおとこ君の御かたに、少将と
申は、少納言がいとこに侍り。とのゝつほねにまかり侍し
かば、かのきみも、この殿の人としりて、こゝろづかいしたま
えりき。御かたちのなまめかしさは、げにたぐひあらじ
とこそ見侍りしか。「御むすめおほかりときゝしはいかゞ」とて、
おほい君より|り|あはじめて、くわしくとひきこえ給ひし
かば、かたはしづゝきこえ侍りしかば、おほへの御うへを申侍し
かばなん、いといとうあはれがりきこえ給て、「我い|は|とお
もふさまにおはすなるを、かならず御ふえ|み|つたへてん
や」との給ひしかば、「かくいとあまたおはしさ|ま|すなかに、
御母きみなどおはしまさねば、こゝろぼそげにおぼして、

（45・オ）

かゝるすぢの事おぼしかけず」と申侍しかば、「その御お
はせぬこそは、いとこゝろぐるしくあはれまさらめ。我
もとには、いとはなやかならざらん女の、ものおもひしり
たらんが、かたちおかしげならむこそ、もろこし、しら
ぎまでもとめてんとおもふ。こゝにおはするみやす
所はなち奉りては、ちゝはゝをはする人也|や|おはする。
さて心にまかせでおはすらんよりは、わたくしものにて、
ところにすませ奉らん」など、いとこまやかになん、夜ふ
くるまでのたまはせしが、まかりてのちも、「かの事は
いかに。御ふみやたてまつるべき」とのたまはせたり|り|し
こど、「おりあしくて。いま御らんぜさせん」と申しし」といへど、
いらへもしたまはずなりぬるほどに、ざうしより人たづ

（45・ウ）

ねきて、「とみの事きこえん」といへば、いでたり。「人おはし
て。まづいでたまへ。きこゆべき事なんある」といへば、
「しばしさ|ま|て。御せうそこきこえさせん」とて入ぬ。「御あへづ
らい仕侍らんとおもひ給へ侍りつるを、とみの事とて、
人まうできたればなん。きこえさせつることのこり
もまだいとおほかり。えんにおかしうて侍りし、まめやかに
きこえさせ侍らん。うへには、かくおり|り|侍りぬとなきこえさ
せ給ひそ。おどろきさいなまんものぞ。さりぬべくは
まうのぼらん」とておりぬ。少将、木丁をしやりて、
「おかしくものぎゝよくいひつる人かな。かたちもきよ
げなりとみつるほどに、かたのゝの少将をかたちよしと
ほめきかせ奉りつるにこそ、みまうく成ぬれ。さもえいらへ

（46・オ）

たまはで、こなたをみをこせ給ひて、こゝろもとなげ
にくちづくろひし給へるかな。侍らざらましかば、かひ
ある御いらへどもあらまし。ふみだにもてきそめなば、かぎり
ぞ。かれはいとあやしき人のくせにて、ふみひとくだり
へ|や|りつるが、はづるゝやうなければ、人のめ、御門の御めも
もたるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞ。し|か|。
そがうちに、わたくしものときこゆれば、いとおぼく|え|こと
おはするは」と、いとあひなく、ものしげにおぼして、ものも
のたまはず。「など物のたまはぬ。おかしうおもひ給へることを、
ものしうきこゆるが、いらへにくゝおぼさるゝか。京のうち
に、女といふかぎりは、かたのゝ少将めでまどはぬなきこそ、う

らやましけれ」との給ば、女君、「その数ならねばあや

（46・ウ）

あらん」としのびやかにのたまへば、少将、「このすぢはいとやんごとなければ、中宮ばかりにはなり給ひなんを

や」とのたまへど、をさ〳〵さもえしらぬ事なれば、いか|ら

えず。物ぬひゐたまへる手つき、いとしろうおかしげ也。

あこきは、少納言有とおもひて、たちはきがこゝろあしう

しければ、しばしとおもひて入にけり。下がさねはぬい出て、

うへのきぬをらんとて、「いか|か で。あこきおこさん」との給へば、

少将、「ひかへん」との給へば、女君、「みぐるしからん」との給

へど、木丁

をとのかたにたてゝ、おきゐて、「なをひかへさせたまへ。いみ

じきものしぞ、まろは」とて、むかひてをらせ給ふ。いと

つれなげなるものから、こゝろしらひのよういすぎて、

いとさかしら也。女君わらふ〳〵をる。「四の君の事は

（47・オ）

まことにこそありけれ」とのたまへば、「おほんゆるされ

あるをしらずがほなりや」とのたまへば、「ものぐるおし。

かたのゝ少将のわたくしものまうけん時はしも、おほ也|や

け〳〵しくてとられん」とわらふ。「夜いとうふけぬ。おほし

ねたまいね」とせむれば、「いますこしなめり|り。はやうねた

まひ。ぬいはてむよ」といへば、「ひとりをき給へるよ」と

て、ね給へるほどに、北方、ぬはでねやしぬらんと、うしろ

めたうて、ねしづまりたるこゝちに、れいのかいまみのあな

よりのぞけば、少納言はなし。こなたに木丁たてたれど、

そばのかたよりみいるれば、女、こなたのかたにうしろを

むけて、もたる物をゝる。むかひてひかへたるおとこ、

なまねぶたかりつるめもさめ、おどろきてみれば、白|白き

（47・ウ）

うちきのいときよげなる、かいねも|りのいとつやゝかなる

ひとかさねて、山吹なる、またきぬのあるは、女のもきた

るやうに、こしよりしもにひきかけたり。火のいとあかき

ほかげに、いとみまほしうきよげに、あいぎやうづき

おかしげな也。またなくおもひいたわる蔵人少将より

もまさりて、いときよげなれば、こゝろまどひぬ。「男

したるけしきはみれど、よろしきものにやあらんとこそ

おもひつれ、さらにこれはたゞものにはあらず。かくば

かりそいゐて、めゝしくもろともにするは、おぼろけの

こゝろざしにはあらじ。いといみじきわざかな。よくな

りて、わがしだひにはかなふまじき也」などおもふ|ふに、物

ぬいの事もおぼえず、ねたうて、なをしばしたてれば、

（48・オ）

「しらぬわざして、まろもごうじにたり。そこもねぶた

げにおほしたなめり。なをぬいさしてふし給て、北方れ

いのはらたてさせ給へ」といへば、「はらだち給ふをみるがいと

くるしきなり」とて、なをぬふに、あやにくがりて、火を

あふぎけちつ。女君、「いとわりなきわざかな。とりだにを」と、

いとくるしがれば、「たゞ木丁かけ給へ」とて、手づからわぐみ

かけて、かきいだきてふしぬ。北の方きゝはてゝ、いとねたし

とおもふ。「れいのはらたてよ」といひつるは、さきぐわがはら

だつをきゝたるにやあらん、かたりにけるにやあらん、
いとねたしと、つく〴〵ふしておもふに、ゆくかたなければ、
なをおとゞに也申てましどおもへど、かたちはよし、さき
〴〵なをしなどみるに、よき人ならば、もていでやし

（48・ウ）

たまはんとあやうくて、なをたちはきにあひたるといひ
なして、はなちすへたればかゝるう、へやにこめてん、いかで
か「はらたゝせよ」といはすべきと、いとねたきまゝに
おもひたばかる。「こめたらんほどに、おとこはおもひわすれ
なん。わがおぢなるが、こゝにざうして、てんやくのすけにて、
身まづしきが、六十ばかりなる、さすがにたはしきに、からみ
まはさせてなきたらん」と、よ一夜おもひあかすもしらで、
少将いとあはれに打かたらひて、あけぬればいで給ひぬ。
やがていそぎぬいかけつるほどに、北方をきて、ぬいさすと
みしを、まだしくは、ちあゆばかりいみじくのゝしらんと
おはして、「ぬいものたまへ。いできぬらん」といはせ給へれば、いと
うつくしげにしかさねていだしたれば、ほいなきこゝちして、

（49・オ）

くちおしく、いかに出きにけりとてやみぬ。少将の御もとより
御ふみ有。「いかにぞ、よべのぬいさし物は。はらまた立いでずや。
いときかまほしくこそ。さて、ふえわすれてきにけり。とり
て給へ。只今内の御あそびにまいるなり」と有。げにいとかう
ばしきふえあり。つゝみてやる。「はらはけしからず。かうなお
ぼしいでそ。人もこそきけ。いとようゑみてなんあめる。
ふえたてまつる。これをさへわすれ給ひければ、

これもなをあだにぞみゆる笛竹のてなるゝ
ふしをわするとおもへば」とあれば、少将いとおしとおもひて、
あだなりとおもひけるかな笛竹のちよもねだ
みんふしはあらじを」となんありける。との少将いでぬるす
なはち、北方、おとゞに申給ふ。「さる事は有なんやとおふも

（49・ウ）

しるく、このおちくぼのきみの、やさしいみじき事を
しいでたりけるがいみじき。さすがにさしはなれたる
人ならば、ともかくもすべきに、いとこそかたはなれ」とのた
まへば、おとゞおどろきまどひて、「なにことぞ」ととひ給へば、
「この蔵人少将のかたなるこたちはきといふは、この月比、あこき
にすむときゝおもひつるは、はやうさうじみにたちかゝりに
けり。ふみの返事を、しれたるものにて、ふところに入て
もたりけるを、この少将の君の前におとしたりければ、
みつけ給ひて、くわしくこゝろづきたる君にて、「たがぞ」と
たちはきにとひせめ給ひければ、かくまで、しは〴〵と申
ければ、「いときよげなるあいむことり給ひてけりな。あな
名だゝしき。人のみきかんもいといみじう。これなすてせ。

（50・オ）

すまひそ」と、いとはづかしげにのたまひける」と、くわしく
申給ひてければ、おいたまへるほどよりは、つまはじきを
いとから〴〵しうしたまひて、「いといふかひなき事をも
したるかな。かくておれば、みな人子の数としりたるに、
六ゐといへど、蔵人にだにあらず、つちのたちはきの、とし
はたちばかり、たけは一寸ばかりなり、かゝる事はしいづべき

や。さるべきずらうあらば、しらずがほにてくれてやらん
としつるものを」。北方、「そいと口おしき事。をのがおもふ
やうは、あまねく人しらぬさきに、へやにこめてまもらせん。
をんなおもひたれば、いであいなんず。きてほどすぎて
ともかくもし給へ」と申給へば、「いとよかなり。たゞいまおひ
もてゆきて、此きたのへやにこめてよ、物なくれそ。

（50・ウ）

しほりころしてよ」、おいほけて、ものもおぼえぬまゝに
のたまへば、北方いとうれしとおもひて、きぬたからかに
ひきあげて、おちくぼにいまして、ついゐて、「いといふ
かひなきわざをなんし給たる。子どものおもてぶせにとて、
おとゞのいみじくはらだち給ふて、「こなたになすませそ。
とくをきたれ。我まもらん。たゞいまをいもてこ」となん
の給へる。いざ給へ」といふに、女、あさましう侘しうかなしうて、
たゞなきになかれて、いかにきゝ給ひたるならむと、いみじとは
おろかなり。あこき、まどひいでゝ、「いかなる事をきこしめし
たるぞ。さらにしあやまちせさせ給へる事おはしまざゞ
める物を」と申せば、「いでこのしをさきをかりて、なさくじの
そ。いかにしたりつる事にかあらむ、われにはかくしへだて

（51・オ）

給へど、おとゞのとまりきゝてのたまふぞ。すべていとあしき
もしらぬしうもたりて、わきばみおもふきみにまさら
せんと思ひつる。こゝにわらは、家のうちになありそ。いざた
まへ。おとゞのの給ふ事有」とて、きぬのかたをひきたてゝ
立たまへば、あこき、なく事いみじ。きみはたさらに
われにもあらず。ものもちらしながら、にぐるものからむる
やうに、袖をとらへ、さきにをしたてゝおはす。しほん色の
あやのなよゝかなる、しろき、又かの少将のぬぎをきしあや
のひとへきて、かみはこの比しもつくろひければ、いとう
つくしげにて、たけに五寸ばかりあまりて、ゆらめき
いくうしろで、いみじくおかしげ也。あこきみ送りて、
いかにしなし奉りたまはんとするにあらんとおもふに、

（51・ウ）

めくるゝこゝちして、あしずりしてなかるゝこゝちを、おもひし
づめて、打ちらしたまへるものどもとりしたゝむ。君
は、われにもあらず、おとゞのおまへにひきいできて、はくり
とついすへられて、「からうじて。あしづからいかずは、いますこし
かりけり」との給へば、「はやこめ給へ。われはみじ」との給へばまた
ひきたてゝこめたまふ。女君のこゝろにもあらずものし
給ひけるかな。おそろしかりけんけしきに、なからはしにけん。
くるゝ戸のひさし二まあるへやの、す、さけ、いをなど、まさ
なくしたるへやの、たゞたゞみひとひらくちのもとにうち
しきて、「わがこゝろを心とするものは、かゝるめみるぞよ」とて、
いとあらたにをしいれて、手づからついさして、じやう
つよくさしていぬ。きみ、萬にものゝかくさくにほひたるが

（52・オ）

侘しければ、いとあさましきには、なみだもいでやみた
り。かくつみし給ふ事ぞ、その事ともきかず、おぼつか
なくあやし。あこきをだにいかにあはんとおもへど、みへ
ず。いとうかりけると身をおもひて、なく〳〵うつぶしふし

たり。北方、おちくぼにおはして、「いづらの、くしのはこのなりつるは。あこきといふさゝじりをりて、はやうとりくしてけり」との給ふもしるく、「こゝにとりをきて侍」といへば、さすがにえこいとらず。「こなに、わがあけざらんかぎりは、あくな」とて、さしかためておはしぬ。いつしかこの事、てんやくのすけにかたらんとおもひて、人まをまつ。あこき、さしいだされて、いみじくかなしければ、なぞや、いでゝやいなましとおもへど、きみのなりはて給はんやうだいもみんとて、

（52・ウ）

いかなるさまにておはすらんと、ゆかしければ、三の御もとに、ひとへにうちたのみたてまつる。「いともあさましく、しりはをらぬ事により、さいなみて、「まかでぬ」との給へれば、みやつかへをしさしぬる事と、いとかなしくなん。いかで、なをいま一たびだにみ奉り侍らん。なをうへに、よきさまにきこえさせ給ひて、此たびのかうじゆるさせ給へ。ちいさくてこそつかうまつりしか。いまはあかれ、ことにて侍れば、このおちくぼのきみの御事まほにし侍らず。いとわびしくなん。あはれにめしつかい、つかうまつりぬる御てをまかで侍なれ」など、ことよくちぎりて、みそかにたてまつりてけり。三君、げにとおもひて、あはれにて、はゝ北の方に、「あこきをさへなにしにさいなむ。つかひつけ

（53・オ）

て侍れど、なきはいとあし。めしてん」との給へば、「あやしく、あいおもひ奉りたるわらはなめり。ぬす人がましきわらわにて、くやつがよくなさんとてしたるにこそあめれ。おちくぼはよにこゝろとはせむとおもはじ。おとここゝろはみえざりつ」との給へば、三君、「なをこたいはゆるしたまへ。らうたくわびおこせつ」との給へば、「ともかくもみごゝろ。まてつかひよしとはしもなの給ひそ。いとしれがまし」と、こゝろゆかずの給へば、さすがにわづらはしくて、えふともよばで、「しばしねんぜよ。いまよく申て」とのたまへり。あこき、おもへど〳〵つきもせず。へやにこもりたまへるきみ、たゝ物もおぼえず。あこきはたおもひよらぬ事なくなげく。御だいをだにまいらでこめ奉りつるを、「この○やつはよもまいらじ」、

（53・ウ）

さばかりらうたげなりつる御さまをひきいで奉りつるほどのけしきおもひいづるに、いみじうかなし。わが身たゞ今人とひとしくてもがな、むくひせんとおもふむねはしる。きみやよさりおはせんとすらん。いかにおもほさんずらん。ことしも、なくなりたらん人をいはんやうに、いみじうかなしくて、おきふしなきいらるれば、つかう人もやすからずみる。女君は、ほどふるまゝに、ものくさきへやにふして、しなば少将にまた物いはずなりなん事、ながくのみいひちぎりしものを、といとかなしく、よべものひかへたりしのみおもひいでられて、いとあはれなれば、いかなるつみをつくりて、かゝるめをみるらん、まゝ母のにくむはれいの事に人もかたるたぐひありてきく。おとゞの御こゝろをさへかゝるを、いとい

（54・オ）

みじうおもふ。かの少将きゝて、いとまばゆく、いかに女君おぼすらん、とてもかくてもわれゆへにかゝる事をみたまふ

ことゝ、かぎりなくなげく。「人まによりて、かくなんとも
きこえよ」とて、「いつしかとまいりきたるをり、あさましとは
よのつねに、夢のやうなる事どもをうけ給に、もの
もおぼへでなん。いかなるこゝちし給ふらんおもひやりき
こゆるも、おぼすらんにもまさりてなん。たいめんはいかでか
あらんとすると、いとわびしくなん」とのたまへり。あこき、なる
きぬどもをぬぎをきて、はかまひきあげて、しもびさし
よりめぐりていく。人もねしづまりにければ、「やゝ」と、みそ
かによりて打たゝく。おともしたまはず。「御とのごもりにける
か。あこきにて、かくはし給ふにかあらん」ともいひやりた

（54・ウ）

まはで、なきたまへば、あこき、なく〳〵、「けさよりこのへやの
あたりをかけり侍れど、えなんさぶらはざりつるは。いみじくも
さぶらひつるものかな。しかぐ〳〵の事いひいでたるなりけり」と
申せば、いとゞなきまさり給ふ。「少将の君おはしたり。かくなん
ときかせ給ひて、たゞなきになき給ふ。かう〳〵なん侍つ」と
申せば、いとあはれとおぼして、「さらにものもおぼえぬほど
にて、えきこえず。「たいめんは、

きえかへりあるにもあらぬわが身にてきみを
またみんことかたき哉」ときこえよ。「いみじう、くさきもの
ならびいたる、いみじうみたしくくるしうてなん。いきたれ
ば、かゝるめもみるなりけり」とて、なき給ふとは、よのつねな
りけり。あこきがこゝちもたゞおもひやるべし。人やおど

（55・オ）

ろかんと、みそかに帰りぬ。きこゆれば、少将、いとかなしくおもひ
まさりて、いといとうなかるれば、なをしの袖をかほにをし
あてゝゐたまへれば、あこきいみじとおもふ。しばしためらひ
て、「なを一たびきこえよ。あがきみやさら|ら|にえきえぬ
ものになん。

あふ事のかたくなりぬときくよひはあすを
まつべきこゝちこそせね」。かうはおもひきこえじ」との給へば、
また道に、こゝろにもあらずものゝなりければ、北方ふと
おどろきて、「このへやのかたのものゝあしおとするは
なぞ」といへば、あこき、なく〳〵、「とくまかりなん」と申せば、
女君、「こゝにも、

みじかしと人のこゝろをうたがひしわがこゝろ

（55・ウ）

こそまづはつらけれ」とのたまふも、えきゝあら|え|ず。「しかぐ〳〵
おどろきてのたまへれど、萬もえうけ給はらずなりぬ」と
いへば、少将、たゞいまもはい入て、きたのかたを打ころさば
やとおもふ。たれもなげきあかして、明ぬれば出給ふとて、
「ゐていで奉らんおりをつげよ。いかにくるしうおぼすらん」
と、おろかならずいひをきて、出給いぬ。たちはき、かくまばゆき
事をおとゞもきゝ給ふらんに、こゝにあらむ事も
びんなければ、御車のしりにのりていぬ。あこき、いかで
ものまいらん、いかに心ちあしからんと思ひまはして、
こはいひをさりげなくかまへて、いかでとおもへど、せんかた
なければ、このかたらふちいさき子に、「かのきみのかくて
おはしますをば、いかゞおぼすや」といへば、「いかゞは」といふ。「さ
らば

（56・オ）
人にけしきみせで、このふみ奉るわざしたまへ」といへば、「いで」とて、よりて、あやにくに、かのへやにいきて、「これあけん、く。いかでく」といへば、北方いみじくさいなみて、「なにしにあくべきぞ」とのたまへば、「くつをこれにをきて。とらん」とのゝしりて、打こほめかしてのゝしれば、おとゞ、男にてかなしうしたまへば、「おとりありかんとおもふにこそあらめ。はやうあけさせ給へ」とのたまへど、いみじくの給ひて、「いましばし有（有）て、あけんついでに」との給に、をそばへて、「あれをしこほちてん」と、はらだちのゝしれば、おとゞてづからいまして、いづらとて、ついかゞまりてさしとらせて、「あやし。なかりけり」とていでぬれば、「まさにさか（か）しき事せんや」とて、はしりうちたまふ。かのふみを、はさまより火のひかりのあたりたるより、これはあこきが萬の事かきて、

（56・ウ）
はかなきさまにしてをこせたる成けり。されども、物くはんともおぼえでをきつ。北方さすがに、日にひとたびものくわせん、ものぬいにより、命はころさじとおもひて、てんやくのすけをひゝによびて、「かうくなん。しかくの事あれば、こめをきたるを、さる心おもひたまへ」とかたらひたまへば、いともくうれし、いみじとおもひて、くちはみゝもとまでゑみまげてゐたり。「夕さりかのゐたるへやへおはせ」などちぎりたのめにまふに、人くればさりぬ。あこきがもとに少将の御ふみあり。「いかに。そのへやはあくやと、いみじくなん。なをびんぎあらばつげられよ。さりぬべくは、かならずく奉り給て、御返あらば、なぐさむべき。いとあはれなることを思ふに」とあり。さうじみに、をろかならずいみじき事をかき

（57・オ）
たまひて、「いとこゝろぼちげ（そ敷）なりし御せうそこをおもひいづるに、いとわりなくなん。

命だにあらばとたのむあふ事をたえぬといふぞいとこゝろうき」。わがきみ、心つよくおぼしなぐさめよ。もろともにだにこめなん」とかきたまへり。たちはきも、「さらにこの事をおもふに、こゝちいとあしくてなんふして侍る。いかにおもほすらんと、かたはらいたく、いとおしきに、ほうしにもなりぬべく」となんかきてをこせたり。あこき、御返、「かしこまりてなん。いかでか御覧ぜさせ侍らん。とやはいまだあき侍らず。さらにいとかたくなん。いかにし侍らん。御ふみもいかで御らんぜさせ侍らんとすらむ。御かへりはこれよ

（57・ウ）
りもきこえさせ侍らん」ときこゆ。たちはきがもとにも、おなじさまにいみじき事をなんいへりける。二のまきにぞことぐもあべかめる。

〈註〉　凡例は、本誌第５０号参照のこと。

〈付記〉　本稿の資料の閲覧及び翻刻掲載の御許可を賜りました九州大学附属図書館に、深甚の謝意を申し上げます。

（りょう　たん・本学大学院博士後期課程）